

昭和46年2月1日発行 徳田新報社
平成15年10月1日発行 同月刊
俳句雑誌 沖 第34巻第10号

俳句雑誌「おき」



10
月号

沖
発行所

すらり

林 翔

若き日の波郷

名にし負ふすらりの莖や立葵

三彩 四彩 五彩 花火を追ふ花火

花火追ふ花火よ月はほそぼそと

織月は物思ふかたち揚花火

「俳句」八月号の特集「俳句と青春と」で鳥居三朗氏（魚座同人）が石田波郷の青春期について書いておられた。しかし、波郷の青春期には三朗氏はまだ生まれていなかったのだから、作品だけによって批評し、鑑賞しておられるのは当然である。たとえば、

袴暑し金を集めて街ゆけば 波郷について、「仕事をして、その集金に歩いているとは思えない。」とあるが、実際は、波郷は馬酔木発行所に勤務し、和服に袴姿で書店を廻り歩いて、「馬酔木」の売上金を集金していたのである。

私が登四郎氏に誘われて、初めて馬酔木俳句会（会場は神田三崎町、水原産婆学校講堂）に出席した時、最も印象的だったのは、ステージの上で、和服に袴姿の波郷が謄写版のローラーを振り上げては廻し、振り上げては廻して句稿を刷っていた姿

火星接近

なつかしき兄弟星よ夜の秋

盆僧の万の毛穴と乗り合はず

ほんのすこし血を傾けてやる秋の蚊に

七月三十一日、殿畑ただし逝く

炎帝に召されし君かもう会へぬ

八月十五日午前零時

時計針ぴくと動きて大日本帝国忌

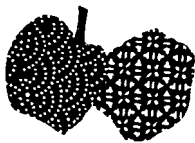
九月三日

師の声のあまりに遠い迢空忌

であった。刷り上がると、詰襟に金
釦姿の楸邨がそれを配って歩いた。
楸邨は教職を辞して東京文理科大学
に学んでいたのである。秋櫻子は、
波郷と楸邨を馬酔木発行所に勧めさ
せ、生活費・学費等を発行所からの
月給で賄わせていたのだった。
若き日の波郷の句を第一句集『鶴
の眼』から若干抽く。

バスを待ち大路の春をうたがはず
春の街馬を恍惚と見つゝゆけり
昼顔のほとりによべの渚あり
百日紅ごくごく水を呑むばかり
秋の暮業火となりて^稲稲は燃ゆ
檻の鷲さびしくなれば羽搏つかも
冬日宙少女鼓隊に母となる日

林 翔



ガムラスタン

能村 研三

北歐紀行

舗装路の冷たさにゐて穴まどひ

土壇場のちからが生まれ蓮は実に

秋の日の亀の子束子濡れ通し

五つまで宛^{あて}行^{がい}扶持の衣被

八月終りの一週間、北欧のスウェーデンに旅行した。同行者は役所の関係で市長の他職員十名であったが、公務の出張ではなく、あくまでもプライベートの視察旅行であった。ヨーロッパは今までに二度行ったことがあるが、北欧は初めてで、憧れの地でもあった。

登四郎も「欧州紀行」というエッセー集を出しているように、三週間に渡ってヨーロッパを旅しているが、北欧までは足を伸ばすことが出来ず、今度行くなら北欧には是非行ってみたいと口にしていた。

今回は一週間という短い時間であったので、スウェーデン一国で、首都のストックホルムと二番目の都市で北海に面したヨーテボリという都市をまわった。

日本からは十一時間、コペンハーゲンで乗り換えストックホルムに着いたが、飛行機の窓からは森と湖の続く景色を見ることが出来た。気候も日本の暑さと違って、十月の終りぐらゐの気温で、Tシャツの人、薄いコートを羽織った人と様々であった。ストックホルムは、北欧のベニスとも言われ、バルト海の入口で海と湖が入り組んだ中に、中世の古い

スウエーデン六句

路地狭きガムラストンの夕時雨

舌平目半切檸檬絞りけり

牢跡の穴倉カフェ秋の燭

空港に木の床馴染み秋の声

冷まじや木彫りの著きヴァーサ号

霧らふ灯の福祉至上の国に来し

※ガムラストンはストックホルムの旧市街で十三世紀の遺跡がホテルや
カフェの地下室として今も残っている。

建物が建っていて歴史を感じさせる
古都の街並であった。ノーベル賞の
授賞式が行われる市庁舎などもスト
ックホルム市長自らに案内をしてい
ただいた。

ストックホルムでは、滞日中、俳
句や日本文化に関心の深かったラー
シュバリエさんにお会いすることが
出来、今後俳句を通して両国が交
流できるように色々お話を伺った。
ホテルはガムラストンという王宮
がある旧市街で、海に囲まれた島の
上にあった。

期待していた白夜は、六月頃が一
番良い時期だそうだが、それでも夜
の九時ぐらいにやっと暗くなる。天
気がよかったかと思うとすぐに時雨
のような俄雨があたり、時ならぬ
虹を見ることも出来た。

今回は慌しい旅であったが、近い
うちに今度は北歐四カ国をゆっくり
旅行したいと思っている。

能村研三



蒼茫集

からす瓜の花 梅村 すみを

昼深く 鱧の骨切る 音幽か
下駄履いて通ればからす瓜の花
日傘たたんで老婆小さくなりけり
デジタルの世に住んでゐて心太
虹の根のあなたや父母眠る島
寂しさのたとへば風の葛葉かな

海の日 吉田 政江

祝・館山支部

海の日や高く高くと安房の鳶
飽採り足裏を空へ泳がせし
海霧流れ顔まだ見せぬ安房の山
流木に足のせてある夏の果
傘たたむ出穂の実の入り嘆きつつ
コンピューターウイルスに位き返り梅雨

空 蟬 中尾 杏子

雨安居池に浅沙の黄のゆらぎ
草刈つて盆みち海をひき寄する
わが影を石より剥がす早かな
空蟬のまなこ無明の黒びかり
浦上忌自動蛇口のほとぼしる
なべて子に遅るる暮し冷し瓜

老鶯とはならず 溯上 千津

師を恋ふや海茫々の男梅雨
潮騒に声張り老鶯とはならず
咲き継ぎて秘めたる闘志花むくげ
万の句に一句を投ず天の川
土用芽のつんつん紅し恙無し
摘んで貰ふことが持て成し庭茗荷



潮鳴集



松 明 柴崎英子

乗れば飛べさうな流木夏の雲
舟虫を散らす一步を樂しめり
夕焼や岩に潮満ち来る力
松明をいのちと掲げ夜泳海女
夜泳海女あがり金星かがやり

百 合 坂本京子

こちら向くつもりさらさら百合はふ
青芭蕉ひと粒づつの雨の音
草刈つて匂ひ重たきひと鎌目
句読点忘れしひと日水中り
暑さ待ち待ちぬて手足よそよそし

「サムサノナツ」 楠原幹子

祝・館山支部

雲の峰出航の帆の上がりけり

年寄が「サムサノナツ」の田草取る
立たされつ子向日葵の花むしりをり
八月三十一日なんとなく淋しき日
父へわび状燈籠ひとつ流しけり

息 荒 き 影 白井剛夫

梅雨明くる大樹はぐぐと枝ひろげ
麦藁帽ひさしの奥で目の笑ひ
雪溪に息荒き影落しけり
雷鳥の霧に仔を呼ぶ声ならむ
一雨に洗はれし紺茄子を挽ぐ

天を指す 鈴木夫佐子

郭公のまだととのほぬ暁のこゑ
振り花とて天を指す一本気
遠き日を追ひ母の日傘を閉ぢにけり
夫婦箸おろす清しさ梅雨あがる
切藁を押しあげ出でて貝割菜

沖作品



能村研三 選

海のいろ波うたせつつ甚平縫ふ

手紙派のかな文字涼し見舞状

耀られる逃げ場をさぐる蛸の足

炎昼のはじき返さる磁気切符

野分晴波郷の墓所を掃き清め

梅雨晴間線香立の灰ふるふ

日の丸を買はむと思ふ青山河

みそはぎや先師と波郷背の高き

浮棧橋われも水母となりてをり

笛吹川二筋となり青芒

夜もすがら石をころがす出水川

たかぶりを鎮め旅寝の天瓜粉

浮世絵の女をつんと涼しかり

刷本の八百八町紙魚はしる

はつあきに指ぬきとふやさしきもの

青ぶだう一粒づつの和みかな

千葉

谷口みちる

東京

加藤富美子

福嶋千代子

静岡

岡田千代子

芋の露ふるへてわれをとぢ込めり

山水を傾ちあひたる青棚田

鯛に急かるる生家後にして

山茗荷杉葉の褥厚からむ

海の日の誰が父の波母の波

軽鴨の子の七羽ななつの水輪かな

天領へひびけ草笛句碑開眼

安房の国夜は火の色に海女まつり

やまほどの卵が籠に雲の峰

南西風やくぢらの里の楨垣根

海の日やこころの洞の碧き色

寺清水太古の水の涌くところ

炎天下波郷の墓に風添へて

静かなる噴井の水に鼓動あり

蕎麦切りの弾み包丁蟬しぐれ

草笛やリフトつぎつぎ雲に消ゆ

長野

矢崎すみ子

東京

工藤 進

坂 ようこ

沢音に下山の安堵濃あぢさゐ
敗戦忌蓋の飯粒より食うぶ
フイナーレへ楽士総立ち休暇果つ
浴衣着て真竹のやうな少女かな
悲しきとき嬉しきときも髪洗ふ
抜きんで一茎一花蓮ひらく
大花火消えて己にもどりけり
千年の黙屋久杉の滴れり
滝おとを白と思ひぬ薄暮かな
鯛の木となり椎の微熱持ち
雨雲や水中花にもある疲れ
白南風や木目浮くまで舟洗ふ
干せるだけ干す白南風の船暮し
手花火の影の重なる仲直り
遷宮の楽の尾につく黒揚羽
日盛やコップの中に水平線
海月浮く揚荷の白き頭文字
夏惜しむヒユッテの土間に仮寝して
絵手紙に鏡文字ある残暑かな
銀幕といふ語も古りぬ巴里祭
釣竿のわづかに見えて青すすき
いつぼんのはがねさ走る青蜥蜴
泳ぎ着く足に地球の重さかな
つり草に手首の入る大暑かな

茨城

永井 収子

千葉

富川 明子

愛媛

柴田 近江

長野

松澤 秀昭

千葉

鈴掛 穂

高橋あゆみ

貝殻にオホーツクの砂夏惜しむ
今朝秋の水をにごさぬ魚の群
畦道の草濃く匂ふ稲光
子目高に影といふものなかりけり
炎天の波郷の墓の低きかな
高々と嬰掲ぐるや雲の峰
睡蓮の浄土とまがふ静寂かな
夏暁や胸で受け取る舫ひ綱
立葵すつくと海の青きかな

東京

石川 笙児

千葉

安西きみ子

新人賞予選句（十月）

海のいろ波うたせつつ甚平縫ふ
みそはぎや先師と波郷背の高き
はつあきに指ぬきとふやさしきもの
芋の露ふるへてわれをとぢ込めり
海の日の誰が父の波母の波
静かなる噴井の水に鼓動あり
蕎麦切りの弾み庖丁蟬しぐれ
浴衣着て真竹のやうな少女かな
滝おとを白と思ひぬ薄暮かな
白南風や木目浮くまで舟洗ふ

谷口みちる

加藤富美子

福嶋千代子

岡出千代子

矢崎すみ子

工藤 進

坂ようこ

永井収子

富川明子

柴田近江

沖作品 選後句評

*
能村研三

海の いる 波うたせつつ 甚平縫ふ 谷口みちる

甚平は夏、風呂あがりなどくつろいだ時に着るもので、浴衣よりもややお洒落にも見える。丈は羽織ぐらいで、僅かに膝をおおって前で合わせ、袂がなく付け紐を添えたもので、綿や麻でつくったものがほとんどである。多くは市販の出来合いのものを買ってきて着るのが常だが、この句はご主人の好みに合わせて手作りの甚平を縫い上げた。生地は藍の部分が多いものが使われたのか、膝の上にひろげると、まるで群青色の海の中にいるようで、縫うたびに生地を引き寄せると波を打っているようにも見えた。この句、甚平の生地に海と波を見立てているが、比喩の句としても直喩の表現を使わず言い切ったことで成功した。

みそはぎや先師と波郷背の高き 加藤富美子

東京例会の吟行会で深大寺の石田波郷の墓に詣でた時に作られた句。吟行句でも、単にその場の風景を捉えて描写した句ではなく、波郷の人となりと先師登四郎との関係をきちつと理解した上で作られているのが良い。波郷と登四郎は年齢は登四郎の方が上であったが、登四郎の処女句集『咀嚼音』を出版する時、波郷が跋文を執筆した上にこまごました事の面倒を見てくれた。波郷は「沖」が創刊される一年前に亡くなったが、登四郎に対して早く一誌を持つことを促してくれた人であった。波郷も登四郎も共に背が高く、そんな事でも親しみをもって偲ばれる。この吟行会はちょうどお盆の時でもあり、句の中でみそはぎを二人の俳人の御魂に供えたのだ。

はつあきに指ぬきとふやさしきもの 福嶋千代子

私達の世代では小学校の家庭科の時間に運針が行われ、その時に指貫を嵌めた記憶がある。指貫は、衣類を縫う時に指にはめて、針の頭を押すために使われるもので、右手中指にはめる。指貫の材質は、皮のものや、金属、セルロイドなどいろいろある。たいていは裁縫箱に必ず収められていた。最近の若い女性は裁縫などに縁遠くなっているようだが、一時代前の女性は針と糸は必ず携帯して、取れた釦をつけたり、ちよとしたかぎ裂きなどを繕った。この句、はつあきが使われているが、秋めいた涼しさを直接肌で感じる時、指を一部でも覆う指貫に温もりのあるやさしさを感した。

(以下略)